

平成22年度秋季展

寺院の移動からみた
城下の形成

城下町金沢と

寺院群

玉川図書館近世史料館

「延宝年間金沢城下図」(090-598)

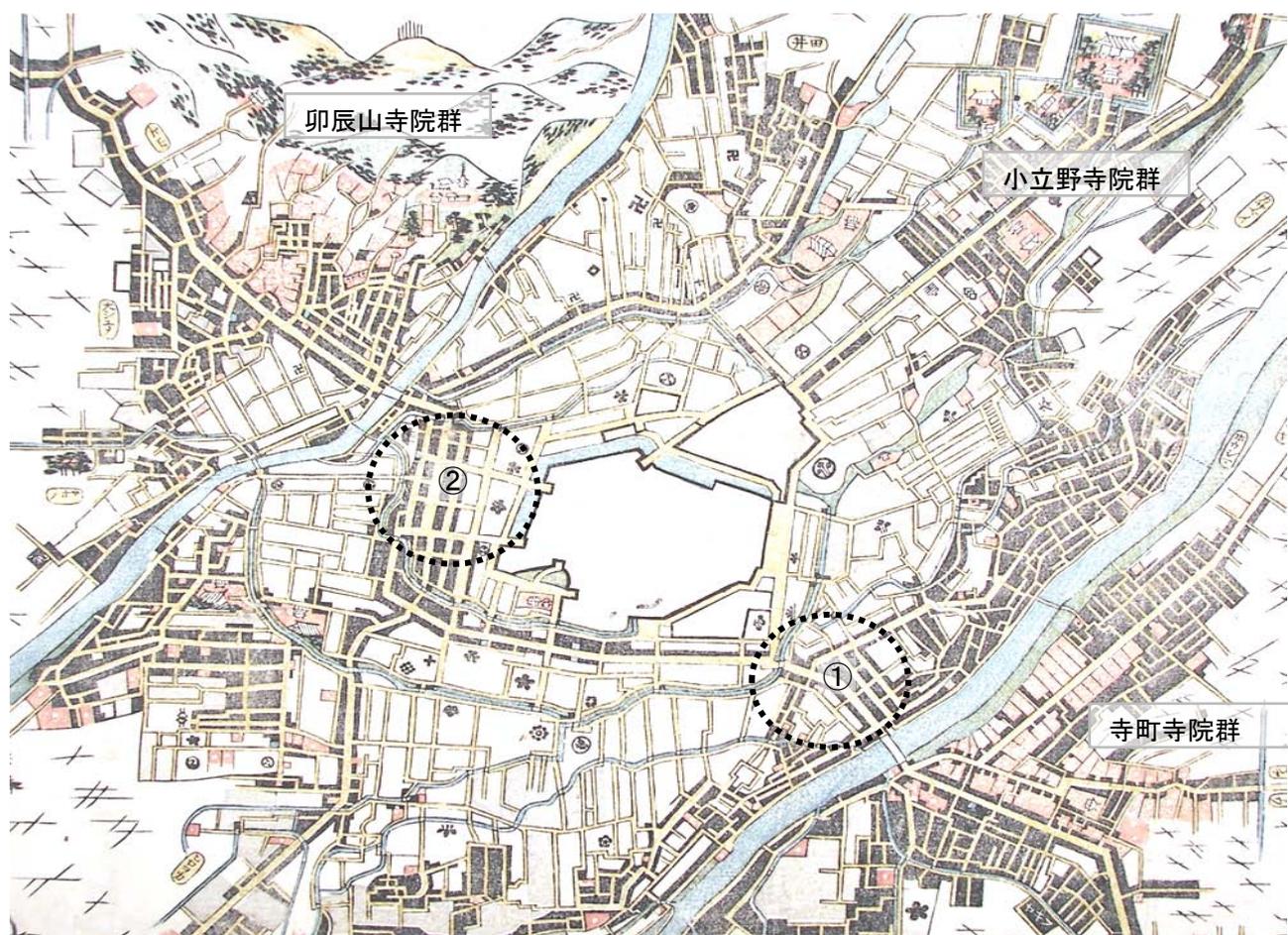
はじめに

現在金沢市域の寺院群といえば、寺町・卯辰山の寺院群があり、小立野台地にも宝円寺・天徳院や八坂の寺院群がある。近世城下町金沢の構成、武土地・町人地・寺社地・道筋などは、城下図を見る限り寛文・延宝期(17世紀後半)以降、幕末に至るまで細部を除けば基本的には変わっていない。現在も当時の道筋や区画が多く残っている。

寛文期、17世紀中頃には城下町は完成していたとされるが、そこに至る状況を寺院の移動や寺院群の形成からたどってみる。寛文期頃までの、近世前期の城下の形成に関する史料はそれほど多くはない。そこで寺院の由来書等に記された寺院の移動、特に金沢城下外からの移入や城下内での移動の記述から、城下形成の一端がうかがえる。

城下の寺院群について、宝永期(18世紀初)に著された「三壺聞書」によれば、元和2年(1616)以前には、①河原町あたりの寺町と②下口惣構内の寺町があったことが記されている。①は犀川大橋から香林坊橋の間周辺、②は城の北側、大手町・中町周辺、そのあたりに二つの寺院群があったのであろう。「三壺聞書」では元和2年頃にこれらの寺院群が移動したかのように記されているが、各寺院の由来からは元和初年以外にも様々な事由の移動があり、慶長・元和期から寛文・延宝期の6、70年かけて徐々に大きな群となったものである。その中から、城下の形成にかかわる移動の事例について紹介していく。

なお、寺院の由来については主に「貞享二年寺社由緒書 上」(『加越能寺社由来』石川県図書館協会 昭和49年)を主に「三州寺号帳」(加越能文庫16.65-55)等に依った。



金沢地図 寺社版 (090-703) 寺社を橙色で示す。

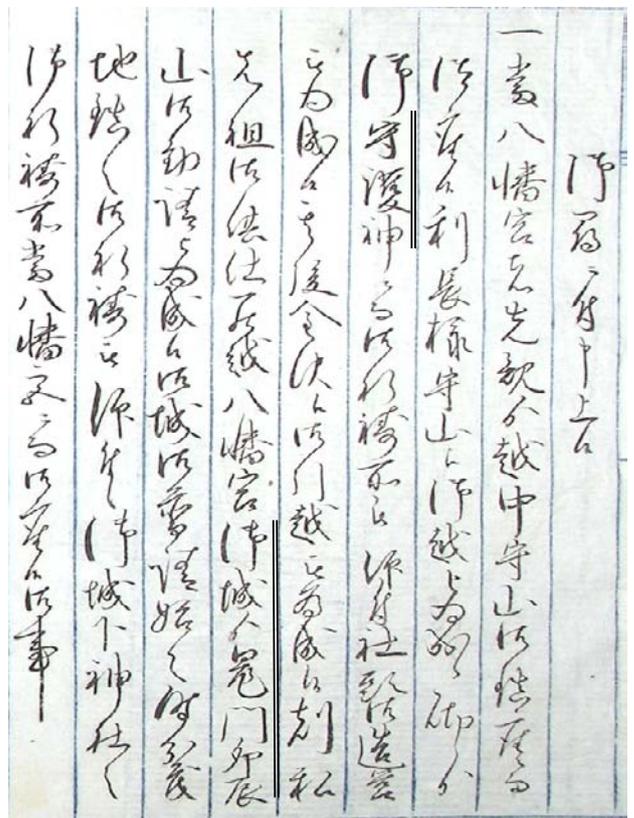
「慶長の危機」と卯辰山寺院群

慶長4年(1599)、初代藩主利家が没し、領国に帰った利長に対し徳川家康は謀反の嫌疑をかけた。いわゆる「慶長の危機」である。母芳春院を人質に出し、城下では惣構を築かせ戦に備えた。

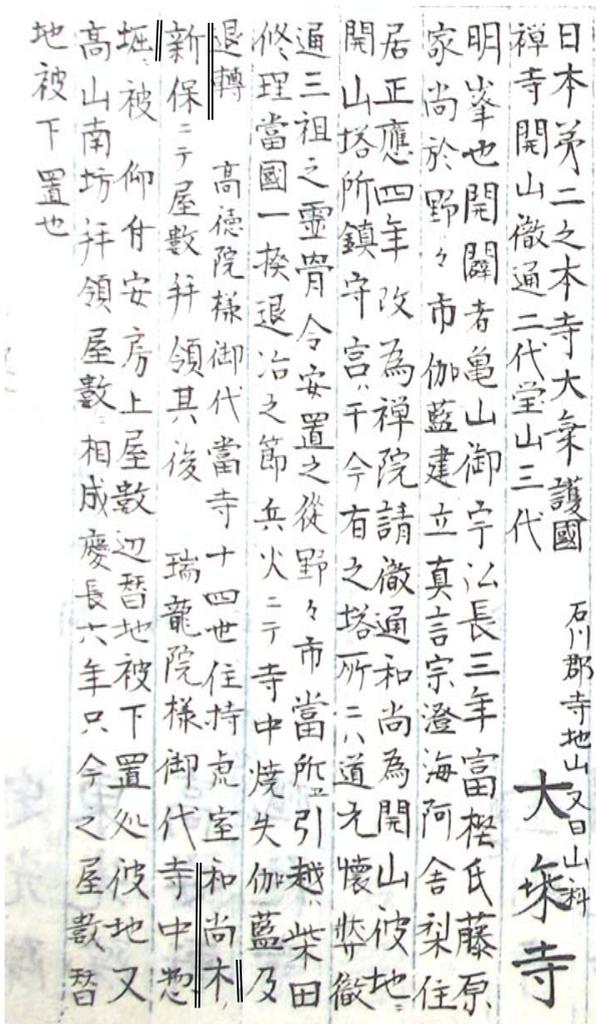
その慶長4年に八幡宮が「御城より鬼門卯辰山御勧請」されている。それに続き慶長6年真言宗の観音院・法住坊・宝泉坊・賢聖坊が屋敷地を拝領している。これらが寺院群の契機と考えられるが、その後は元和・寛永・万治・寛文の約50年については、寛文11年の4ヶ寺以外はまばらに寺院の移入等があり50数ヶ寺の寺院群が形成されたのである。

城の北側周辺からの移動は確認できるもので9ヶ寺程度であり、城下内での移動については元和～万治ではそれほど多くないが、寛文期についてはほとんどが城下内の移動である(後述)。

なお、惣構の構築にともなう寺院の移動については、慶長6年以前では曹洞宗大乘寺が木の新保から本多町へ、慶長6年では日蓮宗妙応寺が枯木町から修理谷上への移動が確認できる。



加越能社寺来歴(16.61-95)
延宝2年(1674)八幡宮の由緒書上



三州寺号帳(16.61-55) 木新保村から本多安房上屋敷辺り、慶長6年大乘寺坂辺り



前田利長知行所目録(090-1161-3)
慶長6年、惣構のための減分(木新保村)の替知行所目録



加州石川郡石浦郷氏子七ヶ村絵図(090-483)
木新保村地と西内惣構の位置関係がわかる。



金城下絵図(大1006)

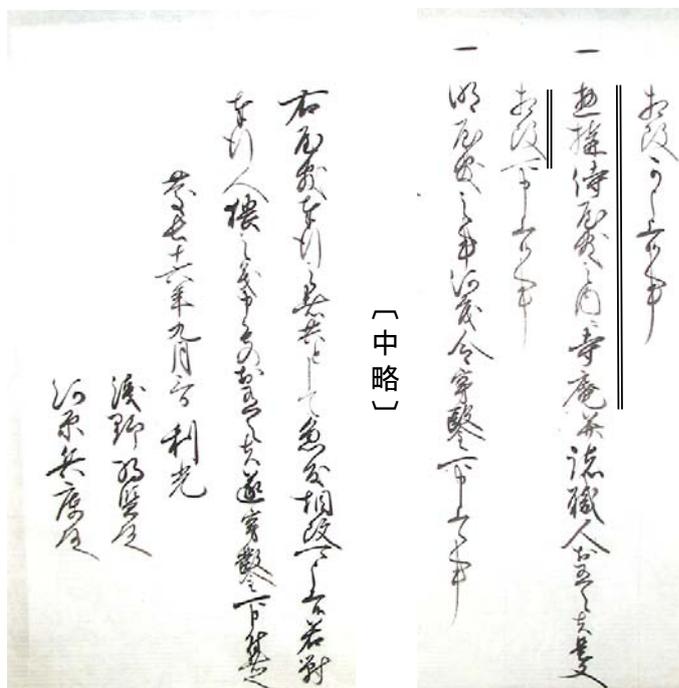
卯辰山寺院群

武家屋敷の整備と寺町寺院群

寺町寺院群は、大きく野田寺町・泉寺町・野町の三つの寺院群からなる、約70ヶ寺の最大の寺院群である。最初のもまとった移動(入)は元和元年(1615)で、野田寺町を中心に10ヶ寺(日蓮宗4ヶ寺、浄土宗3ヶ寺、臨済宗1ヶ寺)が確認できる。貞享2年の由来書ではその移動の理由は主に「御用地」として召上られ、その替地としている。

三代藩主利常は慶長16年(1611)に、浅野将監らを「金沢屋敷奉行」に任じ、武家屋敷や下屋敷の面積を定め、「金沢屋敷之法度」等を出し、武家屋敷の整備に着手している。「惣構・侍屋敷之内ニ寺庵(中略)於有之者是又相改」とあるように、このときから「御用地」により寺院が移動させられていると考えられる。その後は寛永8年の大火にともなう移動も数ヶ寺確認できるが、まとまった移動は万治2年(1659)である。前年に小松で隠居していた利常が没した後、小松から藩士が金沢へ引越(「小松越」)してきたことにともなう移動で9ヶ寺が確認できる。なお、この内5ヶ寺は浄土真宗寺院である。また、この万治2年にも「被下屋敷御定」など武家屋敷についての定が出されている。

寺院群は元和～延宝期の約60年間で形成され、その中で元和と万治の二つの武家屋敷の整備が特徴として挙げられる。また、移動前の寺院の所在については、確認できるものでは、堅町や河原町・片町周辺の寺が17ヶ寺(約2/3)と多い。

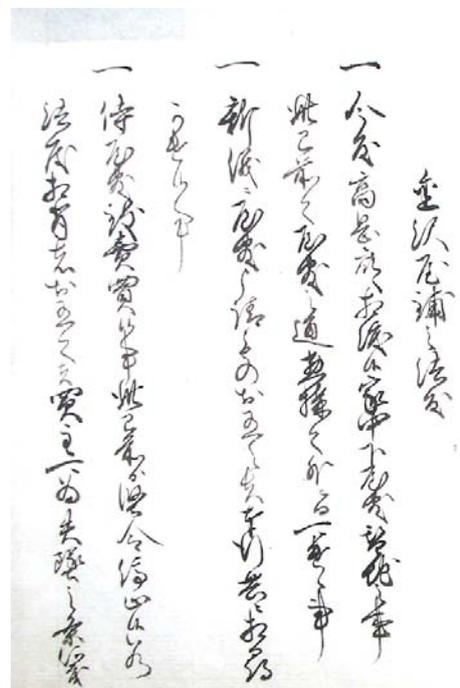


〔後略〕

浅野将監及
河原兵衛

万治十六年九月 利常

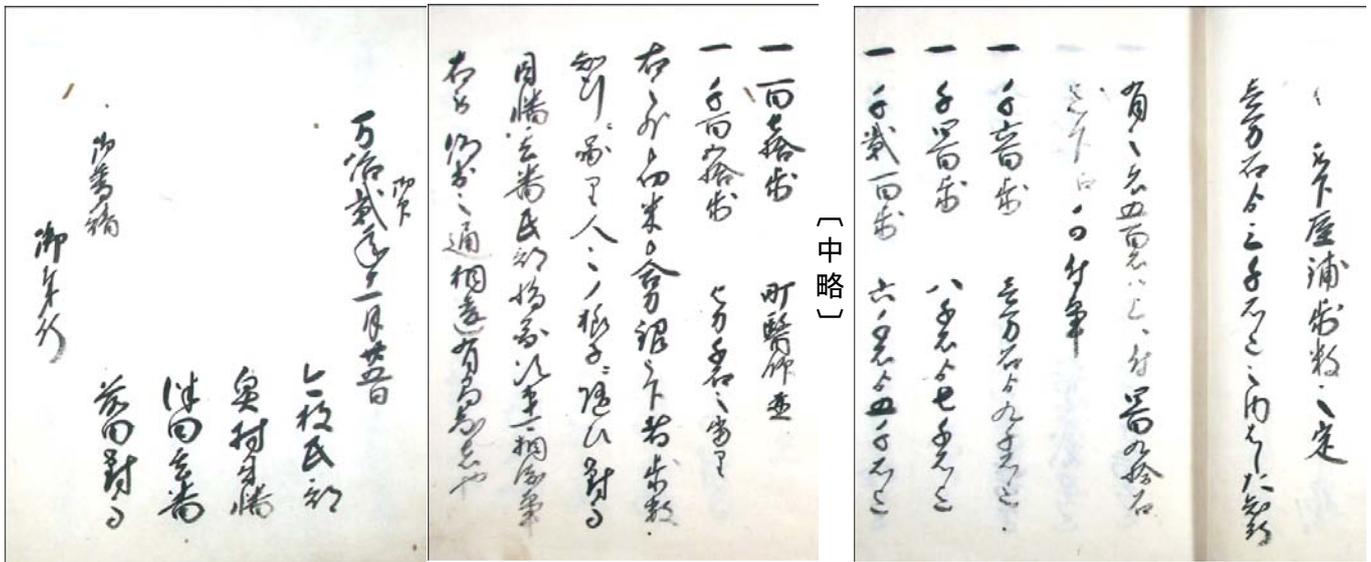
〔中略〕



〔中略〕

万治以前御定書(16.23-18②)

「金沢屋敷之法度」慶長16年



古今御定書(16.23-20③) 「被下屋敷歩数之覚」万治2年

万治2年に小松から金沢へ越してきた藩士のための武家屋敷にもなう寺院の移動は、寺町寺院群だけではなく、卯辰山寺院群(日蓮宗2ヶ寺)や小立野台(浄土真宗3ヶ寺他)にもみられる。

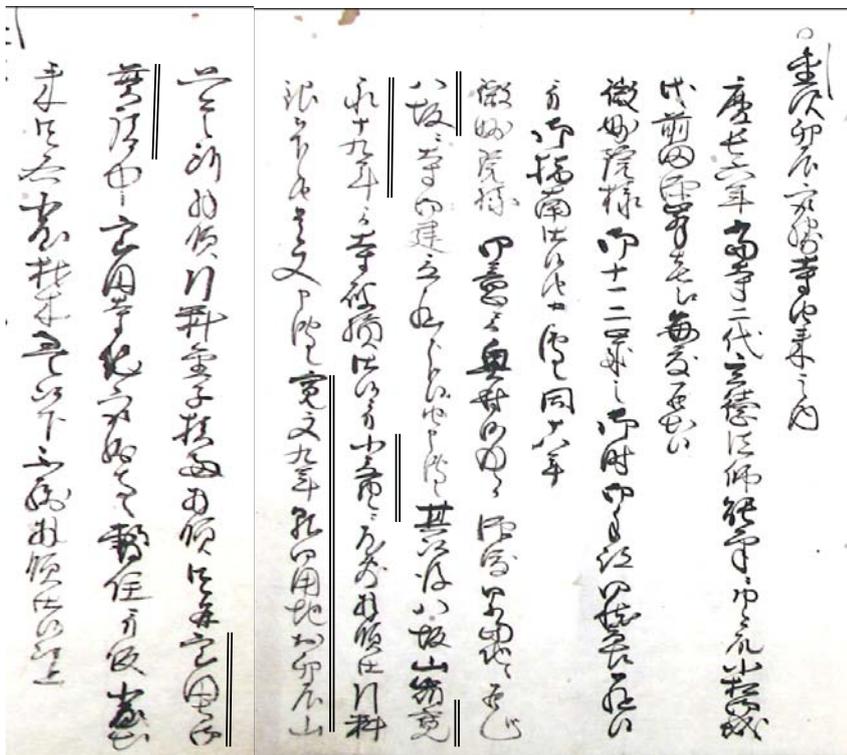
大寺の整備と小立野寺院群

小立野台の寺院は、八坂の寺院群以外は寺院群といえるまとまりはない。藩主前田家の菩提寺である宝円寺(元和6年金沢城周辺から移動)・天徳院(元和9年)や藩主一族との関わりが深い経王寺(承応4年再建)、徳川家康の位牌所である如来寺(寛文2年卯辰山から移動)など大寺がまとまっているのが特徴である。

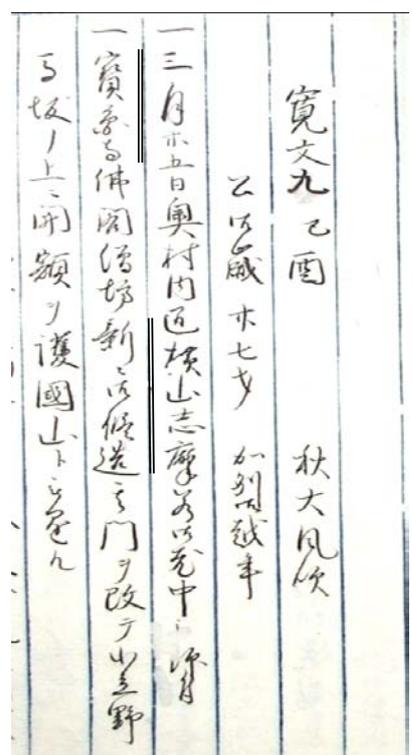
大寺以外については、八坂の寺院群の形成は慶長期以前であり、八坂以外は元和～慶安に8ヶ寺程度の寺院の移入しか確認できないが、万治2年前後には浄土真宗寺院5ヶ寺を含む7ヶ寺が城下内から小立野へ移動している。

寺院の移動からみた特徴としては、卯辰山寺院群や寺町寺院群はその寺院群から別の寺院群への移動はほとんどみられないのに対し、小立野寺院群からは両寺院群等へ8ヶ寺も移動し、その内4ヶ寺はそれ以前に小立野へ移転していた寺であった。

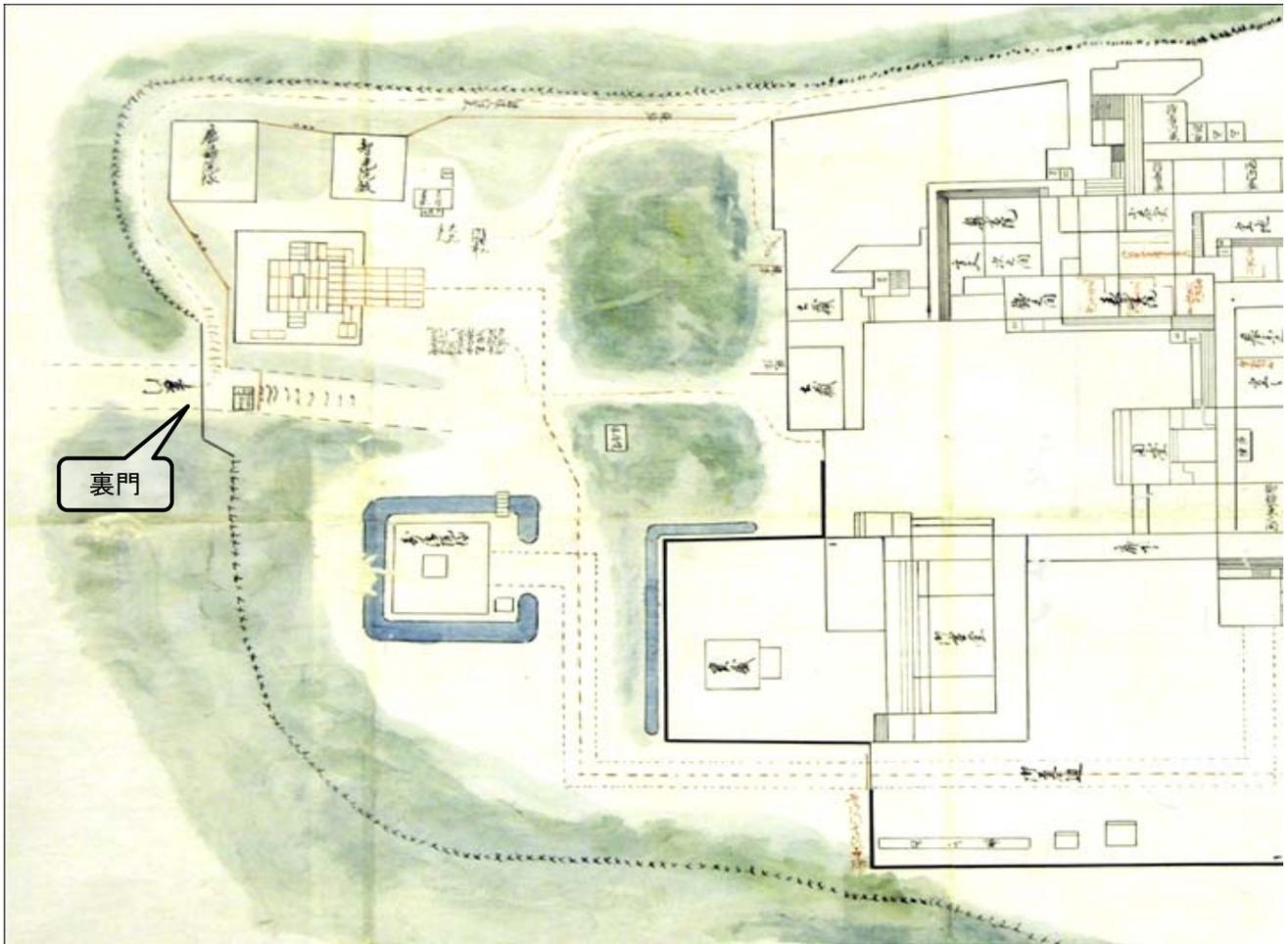
その理由としては、元和初年や万治2年の武家屋敷の整備の他に大寺の整備の例がある。寛文10年(1670)前後に小立野から卯辰・寺町両寺院群へ移動した寺は3ヶ寺確認でき、その内福寿院と最勝寺はその理由に宝円寺普請をあげ、卯辰山へ移動している。なお、宝円寺は寛文9年に5代藩主綱紀により大改修が行われている。



加越能地理志料 社寺部(16.61-105②)
「金沢卯辰最勝寺由来之内」



菅家見聞集(16.28-42②)
「寛文九 乙酉 宝円寺修造」



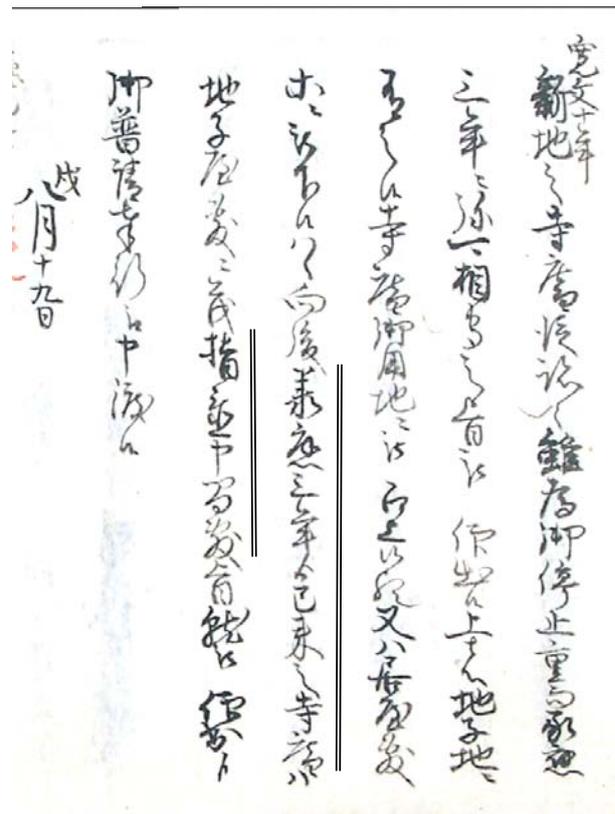
宝円寺絵図(16.61-299)

寛文の改修後の絵図、金沢城側は「裏門」と記されている。

寛文・延宝期における寺院の再興

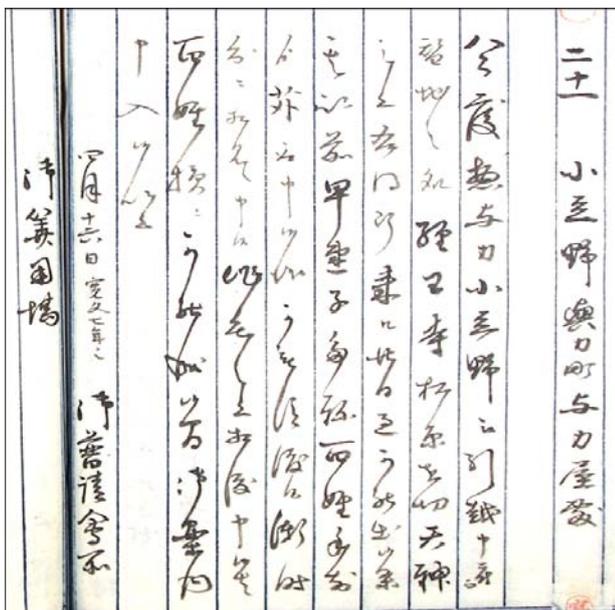
小立野では、寛文期には小立野与力町の整備も行われているが、それにとまなう明確な寺院の移動は確認できない。

その他、寛文・延宝期には、寺院の再興の事例がある。承応3年(1654)以前に絶えた寺院の再興で、卯辰山寺院群では寛文期の移入8ヶ寺の内4ヶ寺、寺町寺院群では延宝2年(1674)に2ヶ寺が再興している。



寺社方御条目帳(16.61-46①) 寛文10年

承応3年以後の新造の寺院を差し止めたもの。それ以前に中絶等の寺院の再興は認められている。



国事雑抄(16.28-77⑦)

寛文7年「小立野与力町与力屋敷」



法船寺町絵図(090-976)

寺院部分については絵画的に描いている。

その他展示史料

- | | |
|---------------------------------|-----------------------|
| 御領国神社来歴 | 16. 61-96 |
| 貞享2年の由来書を集成したもの。卯辰山八幡宮部分 | |
| 法華宗寺院由来(等) | 16. 61-107 |
| 貞享2年の由来書他 卯辰三宝寺部分 万治2年小松から卯辰山へ | |
| 祇陀寺由来等調書 | 16. 61-109 |
| 元禄14年の由緒の疑問について調査したもの。貞享2年由来書部分 | |
| 万治以前加賀藩御定書 | 090-619 |
| 慶長16年金沢屋敷奉行部分 | |
| 加越能寺社附 | 090-175 |
| 加越能三ヶ国寺社 | 090-705 |
| 町続御引請ヶ所家建等仮絵図 | 090-1034 |
| 53 野田寺町・十一屋町絵図 | |
| 58 卯辰西養寺前・卯辰誓願寺前絵図 | |
| 文政期 | 58には「本(元)如来寺町」の記載がある。 |
| 加州金沢武左広濟寺略歴並境内図 | k1-202 |
| 浄土真宗広濟寺の由来等 山崎村から安江町、寛永年中田井口に移動 | |
| 石浦神社氏子地図 | 『金沢市史 資料編18 絵図・地図』別刷9 |
| 石浦神社所蔵史料の複製 | |

※ 掲載史料と展示史料が一致しない場合があります。
 展示史料は展示替え等により変更する場合があります。